

## 『虎明本狂言集』における濁点表記状況 —全例に濁点が付された語を中心に—

渡辺由貴<sup>†</sup>・市村太郎<sup>‡</sup> (国立国語研究所コーパス開発センター)

### *Dakuten in Toraakira-bon Kyogen:* **Focusing on Words that Appeared Always with *Dakuten***

Yuki Watanabe · Taro Ichimura (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

#### 要旨

『日本語歴史コーパス 室町時代編 I 狂言』(短単位データ 0.9) のデータを用い、『虎明本狂言集』における濁点の付与状況を、全例で濁点が付されている語を中心に調査した。全体としては、濁点無表記例のある語より、全例で濁点が付されている語の方が多い。また、全例で濁点が付されている語については、『虎明本狂言集』全体の語種比率と比べ和語の比率が低く、漢語の比率が高くなっていった。これは、使用頻度の高い特定の助詞・助動詞において濁点無表記率が高いためだと考えられる。さらに、全体で用例が 1 例のみの語については、9 割以上の語で濁点が表記されている一方、用例数が多くても他の語と混同される可能性があると考えられる語においては全例で濁点が付されている場合がある等の状況が確認された。『虎明本狂言集』においては、誤読を避けるべく清濁の区別を明確に示す表記が意識的に行われていたと考えられる。

#### 1. はじめに

『虎明本狂言集』(1642) においては、他の中近世期の仮名資料と同様、濁音が想定される仮名全てに濁点が付されているわけではない。濁音で読まれる仮名に「<sup>ゝ</sup>」の濁点を付すという対応が定着するのは近代以降であり、中近世期には、濁音で読まれながらも濁点を付さない表記が混在していた。

沼本(1997)によれば、記号として仮名右肩に濁点を付すのが定着したのは「1600 年後」と推定される(p.927)とのことであるが、濁音で読まれる仮名には濁点を付すという対応が定着するのは近代以降であり(近藤 2005 等)、近世期は、濁点の使用という面では、濁音で読まれながらも濁点を付さない「清濁の消極的表記」(松本 1978、p.25)が混在する時代であった。この過渡的な時代の資料における濁点付与についての調査には『玉塵抄』を対象とした出雲(1976)があり、語種、自立語・付属語の別による傾向や、用例数の多寡との関係、語の識別、「表記の経済性」(p.11)等が指摘されている。一般的な傾向、あるいは資料独自の傾向を見出すためには、さらに多くの資料を対象にデータを蓄積し、検討する必要がある。

渡辺・市村(2014)では、このような状況をふまえ、『虎明本狂言集』における濁点の無表記箇所について述べたが<sup>1</sup>、濁点表記状況を明らかにするためには、一方で全例に濁点が付された語についてもあわせて考察する必要がある。本発表では、『日本語歴史コーパス

<sup>†</sup> ywatanabe@ninja.ac.jp

<sup>‡</sup> tichimura@ninja.ac.jp

<sup>1</sup> 渡辺・市村(2014)は、整備中のデータを利用したため、調査対象を「脇狂言之類」から「女狂言之類」までの各類に限定したものである。

室町時代編 I 『狂言』のデータに付与したタグ情報を利用し、『虎明本狂言集』において全例に濁点が付された語を中心に検討し、中近世期の濁点表記状況を明らかにする試みの一端としたい。

## 2. 『虎明本狂言集』コーパスデータについて

本発表では、『日本語歴史コーパス 室町時代編 I 狂言』（短単位データ 0.9）のコーパスデータを調査対象とする。このコーパスデータは、大塚光信編（2006）『大蔵虎明能狂言集 翻刻 註解』（上・下、清文堂出版）<sup>2</sup>を底本とし、会話(<speech>)、ト書き(<stage>)等、本文中の要素にタグを付与、XML形式で構造化されている<sup>3</sup>。その過程で、濁音で読まれると推定されるものの濁点が付与されていない仮名については濁点付きの仮名に置き換え、<vMark>タグを付与している<sup>4</sup>。例えば、底本テキストで「さらは」となっている箇所を、コーパスデータでは「さら<vMark>ば</vMark>」としている<sup>5 6</sup>。

本発表では、この校訂箇所を示すタグを利用し、おもに全例に濁点が付与されている語について、もともと濁点が付されていた箇所（タグの付与されていない箇所）と濁音を表すタグが付与された箇所とを比較しつつ、計量的に検討することにより、その傾向や特徴を検討する。

## 3. 『虎明本狂言集』における濁点の付与傾向について

### 3. 1. 濁点付与状況の概観

まず、濁音が想定される語のうち、濁点無表記例のある語および、全例に濁点が付されている語について概観する。表 1 をみると、総数・異なりの両方において、濁点無表記の例がある語よりも、全例に濁点が付されている語の方が多くなる。

表 1 濁点無表記語と全例に濁点が付されている語の語数

	総数	異なり
全例に濁点が付されている語	7911	2248
濁点無表記語	4777	574

※以降、濁点無表記語の「総数」には、濁点が表記されている例を含めていない。例えば、語「合図」7例のうち、濁点無表記（「あひつ」）の1例のみを「総数」に含めている。

次に、濁点無表記語例のある語と全例に濁点が付されている語について、語種別・品詞別に整理すると、次のようになる。

<sup>2</sup> 凡例に「仮名遣いや清濁・読点は原文のままとする。」(p.vi)とあり、10曲を影印と照合し確認したところ、問題はなかった。

<sup>3</sup> タグ仕様の詳細は市村他（2012）、市村（2014）等参照。

<sup>4</sup> 振り仮名については<vMark>タグを付与していない。

<sup>5</sup> なお、濁点を付与すべきか判断に迷うものが現れた際は、他の曲中で底本に濁点がついている例がないか、『日本国語大辞典』『時代別国語大辞典』『日葡辞書』等における出現状況はどのようになっているか等を確認し、清音の可能性のあるものには濁点を付与せず、濁音で読まれる可能性の高いものみに付与するという方針を立てている。例えば、「ひさう」（秘蔵）という語は、仮名表記された23例中、「ひざう」表記の例は1例もなく、また『日本国語大辞典』の「ひぞう」の項に「古くは『ひそう』」とあり、『日葡辞書』でも「Fisó」「Fisóna」の形で立項されているため、タグは付与せず「ひさう」のままとしている。

<sup>6</sup> 近代語資料における濁点自動付与の手法については、岡他（2013）の研究があるが、中近世語資料については、『日本語歴史コーパス 室町時代編 I 狂言』が現段階では唯一のコーパスデータであり、機械学習による濁点付与を行うには困難な点が多かった。

表2 語種別語数(総数)

全例に濁点が付されている語(総数)			濁点無表記語(総数)		
語種	用例数	%	語種	用例数	%
和語	4791	60.6	和語	4461	93.4
漢語	2359	29.8	漢語	185	3.9
外来語	43	0.5	外来語	10	0.2
混種語	325	4.1	混種語	77	1.6
固有名詞	383	4.8	固有名詞	42	0.9
その他	10	0.1	その他	2	0.0
計	7911		計	4777	

表3 「『日本語歴史コーパス』語彙統計」による狂言の語種比率【参考】<sup>7</sup>

「日本語歴史コーパス」語彙統計		
語種	用例数	%
和語	207256	88.2
漢語	18750	8.0
外来語	207	0.1
混種語	6196	2.6
固有名詞	2434	1.0
その他	251	0.1
計	235094	

語種別の語数を総数でみると、濁点無表記語は和語が9割以上を占めているのに対し、全例に濁点が付されている語は、和語が約6割、漢語が約3割となっている。また、固有名詞の比率も、濁点無表記語では1%程度であるが、全例で濁点が付されている語については5%近くとなっている。「『日本語歴史コーパス』語彙統計」による狂言全体の語種比率(表3)と比べても、全例に濁点が付されている語の和語の比率の低さおよび、漢語・固有名詞の比率の高さがうかがえる。

表4 語種別語数(異なり)

全例に濁点が付されている語(異なり)			濁点無表記語(異なり)		
語種	用例数	%	語種	語数	%
和語	1360	60.5	和語	395	68.8
漢語	609	27.1	漢語	103	18.0
外来語	10	0.4	外来語	5	0.9
混種語	114	5.1	混種語	33	5.7
固有名詞	147	6.5	固有名詞	36	6.3
その他	8	0.4	その他	2	0.3
計	2248		計	574	

語種別の語数を異なりでみると、表4のようになる。濁音で読むと想定される漢語712語<sup>8</sup>(異なり)に注目すると、85.5%にあたる609語において全例に濁点が付されており、漢語においては多くの場合、全例で濁点が付されていることがわかる<sup>9</sup>。

全例に濁点が付されている語については、総数における比率と似た傾向がみられるが、濁点無表記語については、総数と異なりとで大きく傾向が異なり、異なりでは和語の比率が総数に比べ大幅に低くなっている。これは、接続助詞「ば」や、「をば」「ごとし」等の、用例数の多い特定の機能語において、濁点無表記例が8割を超えているために(渡辺・市村(2014)および表7)、総数で和語の比率が高くなっているが、異なりではその率がやや低くなっていることと関係していると考えられる。

<sup>7</sup> 「『日本語歴史コーパス』語彙統計」で示された各級の合計を整理したものである。その際、記号42364語(句読点等)は除いた。

<sup>8</sup> 全例に濁点が付されている609語と、濁点無表記例のある103語の合計。

<sup>9</sup> 後掲の表8において、全例で濁点が付されている語上位の62語の品詞をみても、和語が40語(64.5%)、漢語が19語(30.6%)、混種語が2例(3.2%)、固有名詞が1例(1.6%)となっており、表2・4と同様、漢語の比率が比較的高くなっている。

品詞別の用例数をみると(表5)、全例で濁点が付されている語については、総数・異なりとも、普通名詞の比率が比較的高く、助詞・助動詞の比率は低い。一方、濁点無表記語については、総数では助詞が5割以上、助動詞が約14%を占めるが、異なりではそれぞれ約4%、約2%となっており、表2・4で見られた傾向を裏付けるものである。

表5 品詞別用例数

全例に濁点が付されている語					濁点無表記語				
品詞	総数		異なり		品詞	総数		異なり	
	用例数	%	用例数	%		用例数	%	用例数	%
普通名詞	4639	58.6	1451	64.5	普通名詞	513	10.7	280	48.8
固有名詞	383	4.8	147	6.5	固有名詞	42	0.9	36	6.3
数詞	6	0.1	2	0.1	数詞	0	0.0	0	0.0
代名詞	115	1.5	4	0.2	代名詞	48	1.0	8	1.4
動詞	1684	21.3	440	19.6	動詞	391	8.2	139	24.2
形容詞	255	3.2	49	2.2	形容詞	48	1.0	16	2.8
形状詞	90	1.1	34	1.5	形状詞	9	0.2	8	1.4
副詞	403	5.1	77	3.4	副詞	223	4.7	34	5.9
連体詞	3	0.0	1	0.0	連体詞	8	0.2	2	0.3
接続詞	0	0.0	0	0.0	接続詞	101	2.1	2	0.3
感動詞	76	1.0	6	0.3	感動詞	30	0.6	2	0.3
助詞	60	0.8	7	0.3	助詞	2655	55.6	21	3.7
助動詞	31	0.4	3	0.1	助動詞	675	14.1	12	2.1
接尾辞	159	2.0	21	0.9	接尾辞	30	0.6	11	1.9
接頭辞	3	0.0	3	0.1	接頭辞	2	0.0	1	0.2
その他	4	0.1	3	0.1	その他	2	0.0	2	0.3
合計	7911		2248		合計	4777		574	

表6 仮名別用例数&lt;総数&gt;

仮名	当該仮名 用例総数	全例に濁点が 付されている語		濁点無表記語	
		総数	%	総数	%
が	7374	1126	15.3	145	2.0
ぎ	718	425	59.2	51	7.1
ぐ	492	315	64.0	19	3.9
げ	742	366	49.3	35	4.7
ご	3305	390	11.8	643	19.5
ざ	4249	445	10.5	44	1.0
じ	3930	668	17.0	75	1.9
ず	1290	93	7.2	49	3.8
ぜ	598	318	53.2	21	3.5
ぞ	2145	147	6.9	29	1.4
だ	1977	705	35.7	87	4.4
ぢ	628	280	44.6	15	2.4
づ	1234	221	17.9	368	29.8
で	4659	330	7.1	82	1.8
ど	2915	580	19.9	74	2.5
ば	4128	473	11.5	2708	65.6
び	846	476	56.3	32	3.8
ぶ	934	546	58.5	71	7.6
べ	528	269	50.9	15	2.8
ぼ	551	82	14.9	229	41.6
合計	43243	8255	19.1	4792	11.1

※一語内の二つ以上の仮名で濁点が表記/無表記されている場合は、両方の仮名の総数に含めている。

また、仮名別の用例数をみると表6のようになる。全例に濁点が付されている語に含まれる仮名としては、「ぐ」(64.0%)「ぎ」(59.2%)「ぶ」(58.5%)「び」(56.3%)「ぜ」(53.2%)「べ」(50.9%)が多くなっている。一方、「ぞ」「で」「ず」「ざ」「ば」「ご」等の仮名ではその比率が低くなっているが、これらの仮名は「ば」や「ごとし」等の助詞・助動詞で用

いられるため、濁点無表記の例が比較的多いことが一因であると考えられる。

### 3. 2. 助詞・助動詞について

ここで、助詞・助動詞について詳しくみていきたい。出雲(1976, pp.2-3)は、『玉塵抄』において、「もっとも濁音表記される率が低いのは、付属語、接尾語の類である。」としており、後掲の表8にあがっている、全例で濁点が付されている語(短単位)20例以上の語のうち、助詞・助動詞は、副助詞「がな」および助動詞「です」の2語のみであるが、助詞・助動詞の濁点表記率はどのようになっているだろうか。

表7 助詞・助動詞の濁点表記率

語	濁点 表記例	語全例	濁点 表記率
がな:助詞-副助詞	29	29	100
です:助動詞	21	21	100
ばし:助詞-副助詞	10	10	100
だに:助詞-副助詞	9	9	100
げな:助動詞	9	9	100
もが:助詞-終助詞	4	4	100
なんぞ:助詞-副助詞	4	4	100
がな:助詞-終助詞	3	3	100
が:助詞-準体助詞	1	1	100
べい:助動詞	1	1	100
じゃ:助動詞	1784	1790	99.7
が:助詞-接続助詞	1169	1177	99.3
なり:助動詞	2204	2225	99.1
ぞ:助詞-終助詞	1349	1363	99.0
ばかり:助詞-副助詞	100	101	99.0
が:助詞-格助詞	3736	3780	98.8
ほど:助詞-副助詞	245	248	98.8
ながら:助詞-接続助詞	248	252	98.4
など:助詞-副助詞	243	247	98.4
まで:助詞-副助詞	402	409	98.3
た:助動詞	175	178	98.3
て:助詞-接続助詞	509	519	98.1
むず:助動詞	324	332	97.6
で:助詞-格助詞	420	431	97.4
べし:助動詞	171	176	97.2
なんだ:助動詞	103	106	97.2
いで:助詞-接続助詞	258	266	97.0
ばや:助詞-終助詞	105	109	96.3
ぞ:助詞-係助詞	179	186	96.2
ども:助詞-接続助詞	298	310	96.1
ず:助動詞	488	511	95.5
たり:助動詞	20	21	95.2
たがる:助動詞	14	15	93.3
ど:助詞-接続助詞	30	33	90.9
じ:ジ:和:助動詞	36	40	90.0
で:助詞-接続助詞	36	40	90.0
ずつ:助詞-副助詞	69	80	86.3
まじ:助動詞	60	71	84.5
つ:助詞-副助詞	4	6	66.7
だ:助動詞	2	3	66.7
をば:助詞-格助詞	14	94	14.9
ば:助詞-接続助詞	178	2595	6.9
ごとし:助動詞	18	607	3.0
則ば:助詞-接続助詞	0	1	0

表7に示した通り、副助詞「がな」「ばし」「だに」「なんぞ」、助動詞「です」「げな」「べい」、終助詞「もが」「がな」、準体助詞「が」については、全例で濁点が付されている。また、助動詞「じゃ」「なり」や接続助詞「が」、終助詞「ぞ」、格助詞「が」等の語は、語全体で1000例以上の用例があるにも関わらず、濁点表記率は100%近くになっている。むしろ、助動詞「ごとし」、接続助詞「ば」「則ば」、格助詞「をば」のように、濁点無表記になりやすい語の方が少数である。

このように、『虎明本狂言集』においては、必ずしも全ての機能語が濁点無表記になりやすいわけではなく、特定の助詞・助動詞において濁点が付されないことが多いことがわかる。

### 3. 3. 全例で濁点が付されている語(短単位)について

ここで、濁音で読むと想定される箇所について、全例で濁点が付されている語が20例以上ある語を確認する。表8をみると、「食べる」「呼ぶ」「是非」のような用例数の多い語でも、全例に濁点が付されることがあることがわかる。用例数の多い語においては、一部濁点が無表記であっても、濁音であることを予想することが容易であるように思われるが、これらの語で、全例において濁点が付されている背景には、どのようなことが考えられるだろうか。

表 8 全例で濁点が付されている語 (短単位) のうち用例数 20 例以上の語

語(短単位)	例	用例数	語(短単位)	例	用例数
1 食べる:タベル	た【べ】て、た【ぶ】れば	102	33 床机:ショウギ	しやう【ぎ】	27
2 呼ぶ:ヨブ	よ【ば】う、よ【び】て、よ【ぶ】、よ【べ】	96	33 罪人:ザニン	【ざ】い人	27
3 是非:ゼヒ	ぜ【ひ】	91	35 物語:モノガタリ	物【が】たり	26
4 乍ら:ナガラ(接尾辞)	二人な【が】ら	66	35 志:ココロザシ	心【ざ】し	26
5 定めて:サダメテ	さ【だ】めて御ふつきにござらふ	61	35 勝負:ショウブ	せう【ぶ】	26
5 進ぜる:シンゼル	しん【ぜ】て	61	38 倅:セガレ	せ【が】れ	25
7 合点:ガッテン	【が】てん、【が】つてん	53	38 通すがら:ミチスガラ	みちす【が】ら	25
8 いで:イデ(感動詞)	い【で】くらはう	50	38 出で来る:イデクル	い【で】くる	25
9 逃げる:ニゲル	に【ぐ】る、に【げ】た	49	38 何とぞ:ナニゾ	何と【ぞ】	25
10 山伏:ヤマブシ	山【ぶ】し	48	42 騙す:ダマス	【だ】ます	24
11 何れ:ドレ	【ど】れ	45	42 しゃぎり:シャギリ	しや【ぎ】り	24
11 機嫌:キゲン	き【げ】ん	45	42 餓鬼:ガキ	【が】き、【が】つき	24
13 御:ゴ(接尾辞)	おうご【ご】、ちち【ご】	44	45 恥:ハジ	は【じ】、は【ぢ】	23
13 何方:ドチ	【ど】ちへゆくぞ	44	45 自然:シゼン	し【ぜ】ん	23
15 夥しい:オビタダシイ	お【び】たたしひ	42	45 雁:ガン	【が】ん	23
15 出す:ダス	【だ】して	42	48 前廉:マエカド	まへか【ど】	22
17 時宜:ジギ	【じ】ぎ、【ち】ぎ	41	48 座敷:ザシキ	【ざ】しき	22
18 昆布:コンブ	こ【ぶ】	40	50 博労:バクロウ	【ば】くらう	21
18 座頭:ザトウ	【ざ】とう	40	50 苦る:ニガル	に【が】つた	21
20 聊爾:リョウジ	れう【じ】	38	50 です:デス	大名【で】す	21
20 成敗:セイバイ	せい【ば】い	38	50 何処許:ドコモト	【ど】こもと	21
20 橋懸かり:ハシガカリ	はし【が】かり	38	54 詫び言:ワビゴト	わ【び】事	20
23 棒:ボウ	【ば】う、【ぼ】う	37	54 被く:カズク	か【づ】く	20
23 直ぐ:スグ	す【ぐ】	37	54 流石:サスガ	さす【が】	20
25 出来る:デクル	【で】きた	35	54 互い:タガイ	た【が】ひ	20
25 戯言:ザレゴト	【ざ】れ事	35	54 脅す:オドス	お【ど】す	20
27 苦々しい:ニガニガシイ	に【が】 / \しひ	33	54 首:クビ	く【び】	20
28 がな:ガナ(副助詞)	何と【が】なして	29	54 ブアク:ブアク	【ぶ】あく	20
28 暇乞い:イトマゴイ	いとま【ご】ひ	29	54 楽屋:ガクヤ	【が】くや	20
30 舞台:ブタイ	【ぶ】たい	28	54 慰み:ナグサミ	な【ぐ】さみ	20
30 定まる:サダマル	さ【だ】まつた	28			
30 座禪:ザゼン	【ざ】【ぜ】ん	28			

表 9 濁点無表記の場合に別の語と表記が重なる語の例

語(短単位)	濁点無表記の場合に 表記が重なる語の例	狂言内の表記
1 食べる:タベル	耐える	たへ
2 呼ぶ:ヨブ	酔う、用、様	よぶ、よへ
8 いで:イデ(感動詞)	行く	い(て)
11 何れ:ドレ	取る	とれ
18 昆布:コンブ	請う	こふ
18 座頭:ザトウ	砂糖	さたう
20 聊爾:リョウジ	漁師	れうし
23 棒:ボウ	方、法、箔	はう、ほう
28 がな:ガナ(副助詞)	哉	かな
42 餓鬼:ガキ	柿、垣	かき
45 恥:ハジ	橋、端、箸、嘴	はし
45 雁:ガン	感、羹、爛、漢	かん
50 博労:バクロウ	白浪	はくらう
54 互い:タガイ	高い	たかひ
54 脅す:オドス	落とす	おとい、おとさ、おとし、おとす、おとひ
54 首:クビ	杭	くひ
54 楽屋:ガクヤ	隔夜	かくや

○濁点無表記の場合に別の語と表記が重なる語について

「食べる」全例に濁点が付されていることの一因に、「耐える」との混同を避けることが考えられる。「食べる」のうち、83 例が「たべ」表記であるが、「耐える」6 例のうち 4 例が「たへ」(あとの 2 例は「たえ」)表記であり、仮に「食べ」を「たへ」と表記すると、両者の表記が重なってしまう。このような混同を避けるために、「食べる」において濁点が明示された可能性がある。なお、「食べ」を含む複合語である「食べ酔う」10 例、「食べ過ぎす」1 例についても、全例で濁点が付されていた。

「呼ぶ」については、仮に「よぶ」と表記すると、「酔う」や「用」「様」等の語と表記が重なる。この他、濁点を表記しなかった場合に別の語と表記が重なる語の例を表 9 に示したが、このように、これらの語において用例数が多いにも関わらずそれぞれに濁点が明示された背景には、表記が類似する語との混同を避けることがあると考えられる。

また、「棒」全例に濁点が付されている点についても、「ほう」「ぼう」と表記した場合に起こりうる、「方」等の語との混同の回避が考えられる。ただし、同じく「ボウ」と読む「坊」については濁点無表記例があり、仮名表記の28例中、濁点無表記例が8例となっているが、「坊」の例を見ると、「きたい【は】う」(希代坊)4例、「ふしやう【は】う」(不請坊)3例、「てらのご【は】う」(寺の御坊)1例のいずれも、「方」との混同が起こりにくい。さらに「希代坊」「不請坊」については、次の例のように、同曲内で直前に「坊」の表記がなされており、「ほう」表記であっても、誤読の可能性が低いと考えられる。

(1) きたひ坊にふしやう坊、ふしやう坊にきたい【は】う、 / \、 / \ (名取川)

なお、語という単位に限らず、誤読を招きやすい文字列については濁点が付されやすい傾向も見られ、例えば濁点無表記の場合に「アフ」と誤読しやすいと推測される「アブ」を含む語をみても、「アブクマ(川)」(固有名詞)1例は濁点無表記であるが、他の「危ない」18例、「燈」4例、「炙る」3例は全例で濁点が付されている。また同様に、「オビ」を含む語をみても、「帯」16例、「オビクロウ」(固有名詞)1例、「髯しい」42例、「帯びる」2例、「腰帯」3例、「細帯」1例で「び」に濁点が付されている。

#### ○出現頻度1の語について

他方、誤読を避けるという観点で言えば、出現頻度の低い語については、濁点を付す傾向にあると推測される。そこで、出現頻度1の語(短単位)について、濁点が表記されているか否かを調査したところ、濁点が表記されているものが1172語、濁点無表記のものが97語であった。これらを合計すると、濁音で読むと推定される出現頻度1の語は1269語ということになるが、このうち、9割以上にあたる語で濁点が表記されていることになる。また、全例で濁点が表記されている語は、異なりで2248語あるが(表1)、出現頻度1の語がそのうちの52.1%を占めていることになる。一方、濁点無表記の語は、異なりで574語あるが、出現頻度1の語は、そのうちの約17%となっている。

なお、濁点無表記の97語のうち24語は、同一の形態素を使った語の用例があるため、純粋に出現頻度1とは言い難い語である。例えば、出現頻度1である「梅壺」「伏し沈む」の語については、それぞれ「壺」「沈む」の用例が他箇所にある。これらの語を、出現頻度1の語から除外すると、出現頻度1の語の濁点無表記率はさらに低くなる。このように、出現頻度の低い語では、濁点が付されることが多いようである。

#### 4. まとめ

『虎明本狂言集』において、全例で濁点が付されている語を中心に、濁点の付与状況を調査した。全体として、濁点無表記例のある語より、全例で濁点が付されている語の方が多い。また、全例で濁点が付されている語については、『虎明本狂言集』全体の語種比率と比べて和語の比率が低く、漢語の比率が高い。これは、和語には使用頻度が大きく濁点無表記率が高い特定の助詞・助動詞が含まれることが大きい。さらに、表記用例数が多くとも誤読の可能性のある語については全例で濁点が付されている、狂言全体で用例が1例のみの語については、9割以上の語で濁点が表記されている等、誤読を避けるために清濁の区別を明確に示す表記が行われていたと考えられる。

#### 付 記

本研究は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパスの設計」による成果の一部である。

## 資料・文献

- 大塚光信編 (2006) 『大蔵虎明能狂言集 翻刻 註解』上・下 清文堂出版
- 土井忠生・森田武・長南実編訳 (1980) 『邦訳日葡辞書』岩波書店
- 日本国語大辞典 ジャパンナレッジ Lib <http://japanknowledge.com/library/>
- 室町時代語辞典編修委員会編 (1989、1991、1994、2000、2001) 『時代別国語大辞典 室町時代編』一～五 三省堂
- 市村太郎・河瀬彰宏・小木曾智信 (2012) 「近世口語テキストの構造化とその課題」『情報処理学会研究報告. 人文科学とコンピュータ研究会報告』CH96 (1)
- 市村太郎 (2014) 「近世口語資料のコーパス化—狂言・洒落本のコーパス化の過程と課題—」『日本語学』33-14、pp.96-109
- 出雲朝子 (1976) 「玉塵抄の濁音表記について」『國語學』104
- 岡照晃・小町守・小木曾智信・松本裕治 (2013) 「統計的機械学習を用いた歴史的資料への濁点付与の自動化」『情報処理学会論文誌』54-4
- 近藤明日子 (2005) 「濁点文字使用率から見る濁音表記」国立国語研究所編『国立国語研究所報告 122 雑誌『太陽』による確立期現代語の研究 『太陽コーパス』研究論文集』博文館新社
- 沼本克明 (1997) 『日本漢字音の歴史的研究—體系と表記をめぐって—』汲古書院
- 松本宙 (1978) 「表記論覚え書き・4 清濁の書きわけと音韻史の記述」『弘前学院大学国語国文学会 学会誌』4
- 渡辺由貴・市村太郎 (2014) 「『虎明本狂言集』における濁点無表記箇所について—コーパス整備の過程から—」日本語学会 2014 年度秋季大会発表予稿集

## 関連 URL

- 国立国語研究所コーパス開発センター (市村太郎・渡辺由貴ほか) 編 (2015) 『日本語歴史コーパス 室町時代編 I 狂言』(短単位データ 0.9、中納言バージョン 1.5)  
<https://maro.ninjal.ac.jp>
- 「日本語歴史コーパス」語彙統計  
<https://maro.ninjal.ac.jp/wiki/index.php?CHJ%2F%E8%AA%9E%E5%BD%99%E7%B5%B1%E8%A8%88>